

コイビト（仮）

実嶋ユキ

コイビト

「だからどうするの？寝るの？寝ないの？」

ハルの少し苛立った声にビクリとする。ハルとは寝たい。でも最近俺の心に巣食うモヤモヤした気持ちが邪魔をする。

「、、、」

何も答えない俺の頭をハルは軽く撫でた。

「あんたは考え過ぎ。まだ若いんだから、甘えてればいいのよ。」

ハルはそのままキスをした。ハルにはハルと寝たい俺の気持ちなんてとっくにバレてる。だって、ハルとの関係はそれが主だから。ハルの攻撃的な深いキスに俺のモヤモヤが薄れて、俺もハルの暖かい唇を舌を追い求めた。

「ベッドに行く？」

ハルの誘いに俺は頷いた。

「ふう。手のかかる子ね。でもそこもかわいいから許すわ。」

「ごめん。」

俺のモヤモヤがハルを苛立たせているのはよくわかっている。俺たちは手を繋いでリビングからベッドのある寝室に移動した。

ハルは美容師で美容室の店長をしている。雇われ店長だから誰でもなれるって言っているけど、指名率は常にトップで3ヶ月先まで予約で埋まっている。俺も1年前まではハルの客だったのでその人気っぷりは良くわかる。今は「カットモデル」としてタダで切ってもらっている。いつも申し訳ないと思っても、貧乏学生の俺にとってはかなりありがたい。

ハルの店に行ったのは、ちょうど1年前、俺がたまたま表参道を散歩していた時、路面店で雰囲気良くて、髪を切りたい気分だったので、何も考えずに入ったのがきっかけだ。当然、受付の女の子に「本日は予約でいっぱいなので、予約をされますか？」と笑顔で言われた。予約するのは面倒なので帰ろうと思ったら、ハルが呼び止めた。

「ちょっと待って、今空いてるからどうぞ。」

初めて聞いたハルの声はぱっと見派手な外見よりも低音で安心感があった。

「店長、いいんですか？」

受付の女の子は不安そうだ。たぶん予約が詰まっているのだろう。

「いいのよ。今日桶谷さんキャンセルでしょう？男の子はそんなに時間かからないから。」

小声で受付の女の子と話しているハルを改めてまじまじと見た。長身で細身、背中まである長い髪は緩くパーマがかかっており、髪の色は明るい茶色に金髪のメッシュが入っていた。女の子と話しているハルの横顔は黒ぶちの眼鏡をかけているため隠されているが、彫りが深くハーフのような顔立ちだった。

「こちら、どうぞ〜。」

ハルは俺を促した。並んで立つと10cm以上の差があったので、ハルの身長は180cm以上ありそうだ。前を歩くハルの細身の革のパンツが足にフィットしていてとてもセクシーだった

。

「そのソファに腰掛けてください。」

ハルは俺をソファに座らせ、自分も向かいに座った。

「今日はどうします？カット？」

その時に気付いたが、ハルの言葉遣いは完全に「オネエ言葉」だった。でも不思議と違和感がなかった。もしかしたらハルはゲイかもしれない。少し期待をしつつ「カットをお願いします。」と言った。

「お客様、初めてですよ。私、店長の藤井春臣です。ハルって呼んでね。お名前、伺っていい？」

「遠藤拓海です。」

「タクミ君ね、学生？」

俺は頷いた。軽い人はあまり好きではなかったが、ハルの馴れ馴れしさは嫌いではなかった。むしろもっと近づいて欲しいとさえ思った。

「ふふ、大人しいのね。」

ハルは笑った。

「大丈夫よ～、男だからといって手当たり次第に捕って食いはしないわよ。」

ハルは「ちょっと失礼。」と言って俺の髪を触った。髪質を確かめているようだった。ハルは身長に見合った大きな手をしているようで、少し触れられているだけでもなんとなく気持ちよかった。

「あの～」

俺は勇気を出してハルに声をかけた。

「ん？」

「ハルさんって、ゲイなんですか？」

小声でストレートに聞いてみた。ハルは一瞬驚いたような顔をしたが、次に満面の笑みを浮かべた。

「そうよ。ヘテロでもバイでもなく、ゲイ。」

「オープンにしてるんですか？」

「そう。その方が楽だから。ゲイ、ダメじゃないでしょ？ダメな人は最初から嫌悪感示すから。」

ハルの問いに俺は首を縦に振った。ゲイがダメどころか、俺もそうだ。とてもオープンには出来ない上に、20年間彼氏はいないが。

「もしかして、タクミ君も？」

一応気を遣ったのか、ハルは小声で俺に確認した。俺は小さく頷いた。

「先にシャンプーしますね。」

ハルは何事もなかったかのように、俺をシャンプー台のある部屋まで誘導した。

「ここは個室もあるのよ。特別に入れてあげる。」

いくつかあるシャンプー台を通り過ぎた突き当たりの部屋にハルは俺を入れた。白を基調とした広く落ち着いた個室。ハルによると、予約でフェイシャルエステもできるとのことだった。

「ここならゆっくり話せるでしょ。」

ハルの好意に甘え、俺は20年間彼氏がいないことや、学校の友達には隠していること、いつからゲイを自覚し始めたかをハルに話した。ハルは俺の髪をマッサージをしながらシャンプーし、時々質問も交え俺の話を聞いていた。

「タクミ君、付き合ったことないじゃ、彼氏欲しいんじゃない？」

ハルはシャンプーを流しながら俺に聞いた。シャワーの音で自分の声は消されると思い、俺はハルの問いに大きく頷いた。

「じゃ、私と付き合ってみる？」

一瞬、聞き間違えかと思った。俺が固まったのがわかったのか、ハルは俺の目の上にあるタオルをどけ、椅子を起こした。タオルで軽く俺の髪を拭く。ハルの手はやっぱり気持ちいい。シャンプーをしている時は話しながらも眠くなった。

「私と付き合う？」

確認するように、ハルは聞いてきた。

「でもハルさん、付き合っている人いるんじゃないですか？それに、俺もネコだし。」

「こう見えても私はリバタチよ。だから大丈夫。彼はいるわよ。でも公認にすればOKなの。」

「？」

「彼はいるんだけど、おっそろしく忙しい人でなかなか会えないの。しかも彼はバリタチだから私ネコだし。彼、眞二っていうんだけど、眞二が許可すればOKよ。」

「そ、そんなの。彼に悪いんじゃない、。」

20年間付き合ったこともない俺にはハルやハルの彼、眞二さんの世界観が分らず戸惑った。

「いいのよ。眞二も不特定多数と遊ぶよりはいいっていう人なの。私もそう。でもいくら許可すればいいって言っても私もそれほど暇じゃないから作る時間がなくてね。」

「、、、俺はハルさんが付き合ってくれるなんて夢見ているみたいな気分だけど、それって愛人みたいな感じ？それとも、Hだけするっていう、その、、、」

「や〜ね〜、セフレでも愛人でもないでしょ、私と眞二は結婚してるわけじゃないんだから。言ったでしょ、私は元々リバタチなの。だからタチとしてタクミ君と付き合いたいわけ。言わなかったけど、かなり好みなのよね〜、あ・な・た。でなきゃいくらゲイだからって個室に連れ込んだりしないわよ。」

アハハと笑って、ハルはタオルを俺の頭から外した。

「あらやだ、髪の手乾いちゃう。私がお客さんを食ってるって噂が立たないうちに戻るわよ。」

ハルは新しいタオルを俺の頭に巻いて個室を出た。その時、俺の腰にそっと手を添えてエスコートした。そんな話の後だから、俺は意識して体がビクリと動いた。そんな俺の反応を楽しむようにハルはにっこりと笑みを浮かべた。

後日、会計の時に渡された名刺の裏に書いてあったハルの携帯電話に電話し、もう一度話す機会を設けた。あまりにも急すぎたが、話を流すには惜しいほどハルは魅力的だった。

ハルにとっては二人と付き合うというのは、恋人が二人いるという感覚でどちらかを重視しどちらかを軽視する気はないとのこと。俺はゲイという自覚があるだけで、女も含め今まで付き合った経験がないが、それでもいいかとハルに念押しした。処女が面倒臭いという男と同じように、やっぱり面倒なのではないか、そういう不安があった。

「色々勉強すればいいじゃない。実はネコじゃなかった、なんて人もいるんだから。あ、でもタクミがタチになった時点で別れるわよ。タチのタクミはダメ。」

ハルはそれだけは強調した。

「タチにはならない。眞二さんにはいつ言うの？」

「もう言ってるわよ。かわいい子猫ちゃんを見つけたって。」

「何か言ってた？」

「遊びだったらダメだって。遊ばないわよ、もったいない。」

「、、、」

「あなたの最初の相手が私っていうのを心配してるのよ。失礼しちゃうでしょ。」

ハルはじっと俺を見た。

「タクミはいいの？私は10コ、正確には11コ年上で、オネエで、タチの彼氏がいるけど。自分で言うのも何だけど、正直優良物件ではないわよ。」

「ハルはカッコいいし、頼り甲斐があるから。ちょっと色々不安だけど、俺、ハル好きだよ。」

俺はハルに初めて告白した。その瞬間は会って2回目に告ることなんてないと否定していた自分をさっぱり忘れた。

「ココがファミレスじゃなかったら、確実に押し倒していたわね。」

俺の告白に対し、ハルは男の顔を覗かせた低い声でつぶやいた。

その後、無事ハルのタチ彼眞二さんとも対面を果たした。眞二さんは恐ろしいくらいイイ男で、オーラがあった。素人目にも上質なスーツを着ていて、髪もきっちり整えており、寸分の隙も見られなかった。眞二さんはハルの美容室のオーナーで、ハルの美容室だけでなく他の美容室エステや整体サロンも経営している。ハル曰く実業家とのことだ。

「タクミがいいんだったら俺はいい。」

何だか、付き合いを認めてもらうため親に挨拶をしているみたいなシチュエーションに俺は緊張したが眞二さんはあっさり俺を認めた。そして、仕事があると言ってすぐに帰ってしまった。

「ホントに失礼な男でしょう～。しかもタチの私をネコにするくらい強引な男なの。時々何で付き合っているだかわからない時があるわよ。」

ハルがため息交じりに言った。ハルも緊張していたらしい。

「付き合い長いの？」

俺は好奇心を抑えられずにハルに聞いた。

「そうね、腐れ縁は10年以上前からだわね〜。」

それを聞いて俺は理解した。眞二さんとは同じ土俵には上がれない。ハルは想いは同じだと言ったけれど、ハルは俺と別れることはできても、眞二さんとは別れられない。でもそれでもいいと思った。ハルのことは本当に好きだし、多少の冒険は必要だ。

こうして、ものすごく慎重派の俺にしてはとってもあっさりとは彼のいるハルと付き合うことにした。道徳観云々より、好奇心が勝っていた。

「ゲイの世界は広いようで狭くて、狭いようで広いわよ。」

ハルと付き合うようになって間もなく言われた言葉だ。ハルはたまにスタイリストとして仕事が入ることがあって、芸能人とも接触する機会があるらしい。

「芸能人、やっぱり多いの？」

「思ったより多いかな。私はあまり関わりたくないから深い付き合いは避けてるの。ただでさえストレス多いのに、これ以上ストレスためたらハゲちゃう。」

ハルは長い髪を指にくるくると巻きつけた。

「楽しくないんだね。」

「こんなナリで男だから面白がって声かけてくる人はいるけど、現実には厳しいわよ。潰れたコ何人も知ってるから私は今くらいの距離が丁度いいわ。」

ハルの髪を自分の指にもくるくると巻きつけた。

「ハルの髪は長くてもきれいだね。」

俺の言葉にハルは笑った。

「何？」

「他に長い髪の人を知っているような言い方だったから。男？女？」

ハルは意地悪く聞いてきた。

「違うよ。ただ純粹に思っただけだよ。俺が他を知らないの知ってるくせに。」

俺が拗ねるとハルは優しくキスをした。

「タクミはかわいい。」

軽くて、優しいキスが深いものになっていく。お互い心と体にスイッチが入って体をまさぐりあう。ハルの体から香るパーマ液とシャンプーとタバコとコロンの混ざった複雑な香りをたくさん吸い込む。ハルはそんな俺の顎から首筋を咬むようにたどっていき、喉仏を軽く食む。

「ん、、、」

「2回目だからゆっくりね。」

「、、、う、ん。」

ハルは俺をたくさん甘やかしてくれる。ベッドの上でもベッドを離れても。元々お兄ちゃん気質だとハルは自分で言っていた。でもいつかはハルの元から離れなければいけないということも何となく分っていた。ハルが俺に飽きた時、眞二さんが俺とハルとの関係を許せなくなった時、俺にハル以上に好きな人が出来た時。

それはいつなんだろう。

サトシと初めて会ったのはゲイコミュニティのオフ会。年齢も近くて、服とか生活感が似ていてすぐに仲良くなった。もちろん、俺はハルという彼氏がいることをコミュニティメンバーに告げていたので、強烈にアプローチされることはなかったし、それ以前にそんなにモテないから色恋には縁遠くコミュニティを楽しんでいた。サトシは事あるごとに俺とハルさんの関係をおかしいと言い、いつも軽く絡んでくる。

「だからさ、ハルさんにはちゃんとした彼氏いるんでしょ。」

「俺だってちゃんとした彼氏だよ。」

「ネコ彼ねー。聞いたことないよ。」

「俺らの中では成立してるんだからいいの。」

俺はちょっと複雑な気持ちがしながらもきっぱり答えた。

「サトシはまた絡んでるのー？」

コミュニティメンバーの一人が助け船を出した。

「だってなんか色々不安定じゃん。」

「本人がいいって言ってるんだから、いいんじゃないの？」

別のメンバーが言う。

「そりゃ、そうだけどさ。俺は付き合っている奴に彼氏がいるなんて考えられないし。」

「サトシの価値観をタクミに押しつけちゃだめっしょ。俺はいいと思うよ。なんだか大人の関係って感じ。」

「タクミは遊び慣れた大人じゃねーじゃん。なんか端かれ見てると遊ばれてるんじゃないかかって思うわけ。」

「何それ、それってタクミが心配なだけじゃん。何だかんだ言ってやっぱりサトシはタクミ狙いなんですよ！」

メンバーの言葉に場は一気に盛り上がる。みんな色恋話は大好物だ。

「心配だよ、タクミは。悪いか？だってこのオフ会だってようやく引きずり込んだんだぜ。」

「サトシはタクミと長いもんね。」

「長いって言っても実際に会ったのはつい3ヶ月前。タクミは1年近く潜ってたもんな。」

「タクミはあんたと違ってシャイなの。」

「だから余計に心配なんだよー。」

アルコールが入ってサトシはますます饒舌になった。

「サトシはホントにタクミが好きだねー。」

コミュニティメンバーのからかうような軽い言い方にサトシはムツとして黙った。

サトシはいつも俺とハルさんの関係をおかしいと言う。恋人は一人だと。サトシから見ると俺とハルとの関係はセフレで、ハルが都合のいい時に俺と遊んでいるだけ。でも俺にとってハルが親鳥的な存在であることもよく理解していて、事ある毎に「早く親離れしないと、この世界の売り時は短いぜ」と切り出す。

「サトシは典型的な肉食系タチ、タクミは草食系ネコ。タクミ、気をつけないとサトシに食べられちゃうよ！」

酔ったコミュニティメンバーにからかわれる。

「別れる気ないでしょ。」

コミュニティメンバーで総まとめ役的なキュウちゃんが声をかけてきた。

「うん。俺はハルが好きだもん。お互いがいいってってる間は別に無理して別れる必要もないって思うし。」

サトシは俺の言葉を聞くとため息をついて自分のグラスを持って別の席に行った。

「サトシに義理があるわけでもないんだけど、ゲイが若さで売る期間はホントに短いよ。」

キュウちゃんがキウイサワーを頼みながら言った。何か飲むかと聞かれたので、同じものを頼む。

「どうにかなるだろうなんて思っていたけど、俺もけっこうイイ年になってさ、けっこう焦るよ。」

キュウちゃんは攻めで面倒見が良くて外見もいいからコミュニティの中で一番モテると最初にサトシに言われた。

「でもキュウちゃんモテるってサトシが言ってたよ。」

「特定の相手はいないよ。」

「嘘!？」

「ホントだよ。特定の相手はいない。ちなみに、タクミだったらいつでもOKだから！」

サラリと言って席を立ったキュウちゃんを無言で見つめてしまった。

「俺はサトシみたいに待たない。チャンスがあればけっこう攻めるよ。」

またね、とヒラヒラと手を振ってキュウちゃんはキウイサワーを片手に消えた。突然の公開告白に俺はキウイサワーを持ったまま固まった。そして、俺の周りでは「キュウちゃんがタクミを口説いた!!!」と大騒ぎが始まり、いつも以上に盛り上がり解散となった。

コミュニティのオフ会は楽しい。年齢が近い人が集まっているせいか、気を遣わずに学校の話、会社の話、恋愛話、Hな話ができる。普段はゲイであることを隠しているのもストレス発散場所でもある。この場所に引きずり込んでくれたサトシにはすごく感謝している。